



清新二中だより

教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

進路とコロナ

校長 白石 亨

11月に入ると陽は一日ごとに短くなる。

陽が短くなり朝夕の寒さを感じる季節となると、やはり3年生の「進路」のことが最大の関心事となってくる。

今、3年生は各々の進路に向けて真剣に授業に臨んでくれている。先生方にとっても、自分の希望する進路の実現に向けて精いっぱい努力している生徒の姿が見られるときほど大きな喜びはない。また、先生とのやり取りの中で、高校のこと、自分の希望や成績のことを話しながら、少しずつ自らの進路を見つけていく生徒がいる。一方、早い段階から強い意志で目標を絞り込み黙々と頑張っている生徒もいる。3年生の誰もがこの時期、自分自身を見詰め直し、考え、暗中模索し、悩みながら将来のことを思う。それが進路だと思う。

そして高校入試においては、学力検査は勿論だが、面接も重要な要素となってくる。

特に推薦入試においては面接がとても大切となる。校長として、今まで多くの生徒たちと面接を行ってきた。入試に備えての模擬面接。だが、去年ほど「無念」の言葉の意味が深く身に沁みだした面接練習はなかった。

前任校での話となり恐縮だが、昨年11月、ある男子生徒と面接を行った。

面接では最初に受験高校を確認している。この男子生徒は私立高校は受験しないという。都立高校の入試一本で勝負するという。しかし、事前に担任から校長の手元に届いていた生徒の面接カードには、第一志望校欄に大学附属の私立高校名が書かれていた。

「厳しいんです」と生徒は静かにつぶやいた。「コロナの影響でお父さんの仕事が減ってしまい、家計が厳しいんです。だから志望校を変えたんです…」と一段低い声で答えた。お父さん、お母さんからは「私立を受けても大丈夫よ…」と言われたというが、中学校3年生ともなれば、親から言われなくても家庭の厳しい経済状況は肌で感じとれる。どうやら自分で考え、悩み、自分で判断して志望校を変えたいらしい。また受験のための問題集や参考書も「買ってほしい」とは言い出せず、貯めてきた自分のお小遣いで買って取り組んでいるという。

…返す言葉が出てこなかった。校長として返せる言葉がみつからなかった。

色褪せた上履きの先をきっちり揃え、背筋を伸ばし、この生徒は最後まで気丈に振る舞いながら面接を受けてくれた。コロナを恨むでもなく誰かを恨むでもなく、しっかりと真正面を見据えていた。愚痴のひとつや憎まれ口でも言ってくれたならば、どんなに気持ちが楽になったことか。このことが一層、胸を熱くした。

コロナが私たちの日常に溶け出してきてどれだけの時間が流れたのであろうか。

日本のみならず世界の人々が移動を止め、経済活動も止まってしまった。そしてその影響は中学校3年生の進路にさえも色濃く暗い影を落としていたのだ。自校に限らず、日本中で、どれほど多くの3年生が家庭の経済状況の悪化から進路変更を余儀なくされているのであろうか。このことを思うと、「無念」の思いが込み上がる。

中学生一人ひとりが、大人の知らないところで、気付かないところで、声を挙げずにコロナに対峙している。

これは本校の生徒においても同様であろう。長引くコロナ禍の影響を受け、様々な場面、機会で大きな制約を受けてきた。通常の授業は勿論のこと、宿泊行事や学校行事、部活動でも我慢を強いられてきたのだ。

だが、本校の3年生もしっかりと前を見据えている。すでに10月下旬から本校でも面接練習がスタートしているが立派に面接を受けている。そう、コロナ禍による特別な日常は存在しても、こと特別な未来や将来というものには存在しないのだ。自分の進路、未来を切り開こうと、3年生はしっかりと前を向き前進してくれている。